

「森銑三刈谷の会」だより 40(2025/3/15)

発行 2025/3/15 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

40:20025/2/15(土) 神谷磨利子「森銑三(1895-1985)と師・井上通泰(1866-1941)」参加13人

「森銑三刈谷の会」のこれまでの流れと当日の発表要旨

神谷 磨利子

森銑三が旧友の建築家・蔵田周忠の手になる二坪半の家で過ごした供養塚での時代(1926-1928)は、銑三(29-31歳)にとって希望溢れる時代だったと言える。この時期には東京帝国大学史料編纂所での勤務以外に執筆も多く、『赤い鳥』『子供の科学』などへの掲載もあった。

「森銑三刈谷の会」ではこれまでに、No. 20(2023/7)「供養塚の二坪半の家」、No. 25(2023/10)「『赤い鳥』の森銑三作品」、No. 28(2024/1)「森銑三著『おらんだ正月』」など、供養塚の時代に関連する著作について取り上げてきた。

さらにこの時期に、蔵田周忠に伴われて行った玉川の別荘での井上通泰との出会いは、その後の銑三の研究者としての生き方に大きな影響を与えた。そこで井上通泰から大原左金吾について聴いた話は、刈谷町立図書館の村上文庫整理の際に不明のままであった『地北寓談』についての謎を一気に解消するものであった。その後の通泰・銑三の関係については、『井上通泰文集』(1995/6, 島津書房)の加藤郁也による以下の推薦文が適切な解説となっている。

南天荘大人を敬仰師事された森銑三翁にはすでに、「井上通泰博士のこと」「井上通泰先生のことども」あるいは「南天荘学園」と題された世人うらやむばかりの師弟愛にむすばれた切々追慕の記があった。大正十五年、大人六十一歳より七十六歳で長逝される昭和十六年までの十幾星霜にわたる回想には、博文約礼、学文また行実が意を尽され延べ(ママ)られてある。

本会ではNo. 29(2024/2)「森銑三と書誌学——「塙検校と名古屋の学者達」(『書誌』1926. 12)を読む」で銑三の著した塙保己一の伝記を読んできた。その際、塙検校の偉業の大成を図るため1909年温故学会が創立され、顧問として渋沢栄一、井上通泰が並んでいること

を知った。今回『温故学会五十年史』(石井正己「温故学会と井上通泰」2024/11『温故叢誌』78)により、所在不明であった『群書類従』の版木が文部省構内の倉庫にあることを発見したのが、当時国定教科書審査員として文部省に通っていた井上通泰その人であったということを確認した。銑三が「塙保己一」の伝記をいくつか著しているのは、井上通泰と温故学会との関りに無縁ではないような気がする。

井上通泰を通して新たに多くの人とのつながりが生まれたが、その一人に日本画家で舞台装置もよくした久保田米斎(満明、1874-1937)がいる。刈谷の森家両親から久保田に「このわた」を贈ったとみえ、久保田満明名の礼状が残っている。銑三が人とのつながりを大切にするのは両親譲りなのであろう。

今回は銑三が生涯師と仰いだ井上通泰の存在の紹介に終わったが、銑三は「大原左金吾」(『森銑三著作集』7巻 pp. 460-517)以外に、「熊沢蕃山遺事」(『著作集続編』2巻)「熊沢蕃山の集義和書」(『著作集続編』7巻)においても「井上通泰先生に伺った」話を記している。いずれ本会で取り上げる機会があると良いと思う。

No. 40「銑三と師・井上通泰」に参加して

飯田 芳子

今回の資料の中で、「井上通泰博士のこと」(『森銑三著作集』12巻 pp. 427-428)からの引用部分は、銑三の洩らした小不平に対して一蹴するでもなく婉曲に理を説いて諭した言葉が語られており、師と仰ぐ井上通泰の人格を語って余すところがないと思えた。銑三にとって何物にも代えがたい心の財産となったのではなかろうか。また森銑三と師・井上通泰の初めての出会いはとても興味深くこの一事(大原左金吾『地北寓談』)の話は通泰と銑三を「師・通泰と好学の徒銑三」として結ぶ機縁を果たしたように思える。いずれにせよ国史・国文学の泰斗を師と仰ぐ機会を得られたことは銑三にとり、はかりしれないものであったと考えられる。

なお、用意された資料、「井上通泰の年譜」・「塙保己一の生涯と『群書類従』の編纂」・石井正己「温故学会と井上通泰」により、井上通泰の仕事と生涯を概観できまことに好ましく思えたことを付記したい。

「井上通泰先生その他」と「井上通泰先生の追想」

鈴木 哲

井上通泰(1867-1941)は森(1975)『思ひ出すことなど』の「井上通泰先生その他」でなじみ深い。通泰が柳田国男の実兄であることと、「孺[豎]子教うべし」(じゅしおしうべし) という「史記」の表現を知った。通泰は森の長ずること 28 歳で、「孺子」が納得できる。同稿には永井荷風(1879-1959)の言及があり、これが契機で「永井荷風が森銑三を『真の学者』と呼んだ日」『かりや』45(2024):59-66 となった。経済雑誌社(1909)『大日本人辞書』6 版を入手したのも、森(1941)「井上通泰先生の追想」に同辞書(9 版)を贈られたとの記述による。

森銑三の人脈の広がり

河橋 育実

銑三さんは人によって素晴らしい人脈が広がる方だと改めて思いました。友人のおかげで(今の時代は開かれた皇室といいますが、明治時代に雲の上の存在の皇室と関わりのある)井上通泰と会うことができ、銑三さんの師となりました。銑三さんのお人柄が気安くさせるのでしょうか。

面白かったのは、自分が読みたいと思う本は駄目と言われ、目の前でその本を別の人にあげてしまわれたことです。銑三さんが師と仰ぐお人は人の内面も良く見ているのですね。

銑三さんのお父上もそれぞれ成人した子どもの知り合いを大事にされていたのですね。頭が下がります。

『月夜車』(1984/11、彌生書房)の「南天荘集」を読みました。通泰先生の全歌集の校正を「柳田先生の命を受けて」進めているとあり、銑三さんは信頼されているのだなと思いました。通泰先生の歌「ともすればくづれゆる言の葉の道のはしらと我やなりなむ」を紹介して、明治時代すでに言葉が崩れて行くとありました。今はもっと崩れてますね。

良き師に恵まれた銑三さん

神谷 美恵子

「井上通泰」の話、楽しく聞かせていただきました。学問だけでなく人格にも優れた人物を輩出した松岡家の家庭教育に興味を持ちました。銑三さんとの会話でこの時代の雰囲気のようなものを感じました。志を同じくする人たちが引き寄せられているようにも思いました。

銑三さんは良き師に恵まれ、銑三さんもまた良き師であられた事に感服しました。

一人で何人分もの仕事を成した井上通泰さん

神谷 明子

世の中には一人で何人分もの仕事をする人がいますが、通泰さんは正にその人だと思いました！医者になり、第三高等学校医学部の教授。その間も歴史や和歌の研究をし、満 60 歳を期して潔く医者を辞め、国文学・国史学の研究に専念。御歌所寄人などもされて、私がどうあがいてもなれない仕事をこなされた。

極め付きは『群書類従』の版木の発見。偶然もあったかもしれませんが、目利きできなければ、また葬られてしまいますものね。関東大震災で自分の蔵書が灰になったことにもめげず、自分のやりたいことを通す信念に男の粋を感じました！今の時代を生きる人がこうした信念を持っているかなと!心細くなります!!日本の明治時代はこうした人が作って文化が花開いたと有り難く思いました！でも支える女性がいたことも忘れて欲しくありません。

井上通泰のことは？

長嶋 秀雄

井上通泰は柳田国男の兄ということしか、特に知るところがありません。森銑三氏の先生ということですが、大原左金吾『地北偶談』以外にも、色々ご指導を受けたのでしょうか。『群書類従』の版木を守ったのは大事なことでしょう。和歌の分野での活躍はよく分かりません。

通泰を<つうたい>と読むのか<みちやす>と読むのか、自分は、<つうたい>と読むほど理解してない気がします。吉本隆明は<たかあき>が本名ですが、知った時から<りゅうめい>と読んでいたので、自然と<りゅうめい>と言えるのですが・・・

2025/3-5 予定

41:2025/3/15(土) 視聴覚室：神谷磨利子「反町茂雄『一古書肆の日記』に見る森銑三の弘文荘時代」

42:2025/4/19(土) 第1会議室：神谷磨利子「森銑三(1895-1985)と柴田宵曲(1897-1966)——『柴田宵曲翁日録抄』(『日本古書通信』)を中心に」

〈関連行事〉2025/4/20(日) 大会議室：刈谷市郷土文化研究会 2025 年度総会、14:00- 研究発表 鈴木哲「天気の良い日は[フレイル予防に]論文を書こう：<杉浦日向子は森銑三を敬愛していたか>など」

43:2025/5/17(土)2 階展示コーナー：村瀬典章氏解説「森銑三生誕 130 年没後 40 年展」

今後の話題 長嶋秀雄「服部長七」

*発表者を募集しています。ぜひお声かけください。